



Title	十八世紀ドイツの人間学的転回とハレ大学の学問状況
Author(s)	津田, 保夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/69973">https://doi.org/10.18910/69973</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 十八世紀ドイツの人間学的転回とハレ大学の学問状況

津田保夫

## 1. はじめに — 人間学的転回とハレ大学

十八世紀はカントが「啓蒙の世紀」(Zeitalter der Aufklärung)<sup>1</sup>と呼んだように、ドイツでは思想史的には啓蒙主義の時代にあたる。しかし、トマジウスやヴォルフらの合理主義的哲学が展開された十八世紀前半と、カントやモーゼス・メンデルスゾーンが「啓蒙とは何か」<sup>2</sup>の議論を『ベルリン月報』誌上で行った十八世紀後半とでは、様々な点で異なる傾向が認められるため、初期啓蒙主義(Frühaufklärung)と後期啓蒙主義(Spätaufklärung)とに区分されることも多い。

シュミッテ=ビッグマンとラルフ・ヘーフナーは、初期啓蒙主義の体系的思考から後期啓蒙主義の経験的思考への移行が同時に形而上学的世界像から社会文化的生活世界における人間への関心の変化という思想史的な転換をも示していることを指摘し、これを「人間学的転回」(anthropologische Wende)<sup>3</sup>と名付けた。それは人間学や美学、経験的心理学といった新しい学問への関心と結びついた文学が隆盛してきたことにも表れており、その具体的な担い手として、モーゼス・メンデルスゾーン、アルブレヒト・フォン・ハラー、レッシング、フリードリヒ・ニコライ、カール・フィリップ・モーリツ、ヘルダーの名が挙げられている。<sup>4</sup>

これに対してカルステン・ツェレは、思想史的あるいは学問史的な人間学的転回が1740年から50年頃のハレにおいて、哲学と医学と神学の三つの分野の学際的な交流関係において起こったと主張する。<sup>5</sup>ハレは1694年にブランデンブルク選帝侯フリードリヒ三世による新しい大学が、また翌1695年には敬虔主義者フランケの貧民学校が設立され、啓蒙主義と敬虔主義の重要な拠点となっていた。そのような土壤の上に、バウムガルテンやマイアによる感性的認識の学としての美学や、クリューガー、ウンツァー、エルンスト・アントン・ニコライ、ボルテンらによる心身相関的医学が成立したのであり、これらの新しい学問こそがまさに人間学的転回の特徴を顕著に示しており、その興隆の時期が1740

<sup>1</sup> Immanuel Kant: Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung. In: Immanuel Kant: Werke in sechs Bänden. Hrsg. von Wilhelm Weischedel. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1988. Bd.VI. S.59. ただしカントはこれを「啓蒙された」(aufgeklärt)世紀ではなく、いまだ啓蒙が進行しつつある世紀という意味で用いている。

<sup>2</sup> この議論の概要に関しては拙稿「啓蒙とは何か — 『ベルリン月報』誌上の議論を中心に —」(『ドイツ啓蒙主義研究』 言語文化共同研究プロジェクト2000(大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科)2001年, pp. 1-12.)を参照されたい。

<sup>3</sup> Wilhelm Schmitte-Biggemann / Ralf Häfner: Richtungen und Tendenzen in der deutschen Spätaufklärung. In: Das achtzehnte Jahrhundert. Jg. 19 (1995), Heft 2, S. 168.

<sup>4</sup> Ebd.

<sup>5</sup> „Vernünftige Ärzte“. Hallesche Psychomediziner und die Anfänge der Anthropologie in der deutschen Aufklärung. Hrsg. von Carsten Zelle. Tübingen: Niemeyer 2001. S.1.

年から 1750 年頃にあたるというのである。<sup>6</sup> ツェレはそのような人間学的転回が生じてきた時のハレ大学における学問的風土の特徴を次の五つの点に整理している。<sup>7</sup>

- ① 経験や実験、観察への回帰
- ② バウムガルテンの美学による感性と、マイナーの感情理論による主意主義的過程の新たな評価
- ③ トマジウスとその後継者たちによる折衷主義の発展
- ④ 総体的人間の経験科学を求める学際的な、とくに医学と哲学を統合する努力
- ⑤ 教育的で具象的な書き方、すなわち「ホラティウス的」（教え、楽しませる）な、秩序立てられていない部分もあるエッセイ的な知の表現

そこで以下の節では、ハレ大学において上記のような学問的な生じてきた背景や経緯について検討することにする。

## 2. ハレ大学の学問的土壤

十七世紀末の 1694 年にブランデンブルク選帝侯フリードリヒ三世（のちの初代プロイセン王フリードリヒ一世）によって新設されたハレ大学は、十八世紀半ばまでにはドイツ語圏で最も重要な大学の一つとなった。ハンス＝ヴェルナー・プラールの『大学制度の社会史』によると、十七世紀から十八世紀初頭の大学はすっかり時代遅れになっており、「内容的にも、組織の上でも、荒廃しきっていて、改革なり新設が切実に要請されていた」が、そのような要請にしたがって「諸民族と学問と芸術のための普遍的大学」という理念に基づいて設立されたのがハレ大学であり、そこでは「啓蒙主義の理念が本気で取り上げられ、講義は初めてドイツ語で行われ、初めから歴史、地理、実験自然科学、自然法が教えられ、＜研究と教授の自由＞が推進され」ていた。<sup>8</sup>

またハレ大学では、真理の伝授や解釈ではなく「真理を探究することと、そうした探求の準備をすること」が最重視され、従来的な神学・法学・医学の内容は改められて新たな学科が導入されたが、それは「トマジウスやヴォルフによって提唱されていた合理主義哲学によって推進されたもの」であり、それによって哲学部が新たな脚光を浴びて「独立した学問分野を代表するもの」となり、著名な学者は大学の中に活動する場を持つことができるようになったという。<sup>9</sup>

このような啓蒙主義的理念に基づいた新しい研究教育を目指すハレ大学は著名な教授たちを招聘し、多くの学生を惹き付ける魅力を有していた。設立間もない 1695 年頃にすでに学生数は 600 名を越えており、これはドイツ語圏ではライプツィヒ大学やイエーナ大学に次ぐ数字である。十八世紀前半には学生数は千名以上に達し、ハイデルベルクやケルン、

<sup>6</sup> Ebd.

<sup>7</sup> Ebd., S.11.

<sup>8</sup> ハンス＝ヴェルナー・プラール（山本尤訳）『大学制度の社会史』（法政大学出版局 1988 年）143 ページ。

<sup>9</sup> 同上。

チュービンゲン、ヴィッテンベルク、ケーニヒスベルクなど他の有名大学の学生数が軒並み五百名以下であることと比較すると、当時のハレ大学がいかに多くの学生たちの人気を集めていたかがわかる。<sup>10</sup> このハレ大学を模範として、1737年にはゲッティンゲン大学が、1743年にはエアランゲン大学が設立されている。

ハレ大学の創設にさいして重要な役割を果たしたのは、ドイツ啓蒙主義の創始者ともいわれるクリスティアン・トマジウスである。トマジウスはハレに移住する前にライプツィヒ大学で教えていたが、1687年10月31日に大学の掲示板に一枚の講義概要の予告を貼り付けた。そしてそこにはドイツ語での講義を行うことが書かれていた。保守的なライプツィヒおよび大学という支配体制に大騒動を引き起こしたこの事件こそドイツの啓蒙主義の始まりであるという点において、歴史家たちの意見は一致しているとエンゲルハルト・ヴァイグルは述べている。<sup>11</sup>

トマジウスの講義予告で挑発的だったのはラテン語に変わるドイツ語の使用だけではなく、その講義内容も大学古来の伝統に反しており、彼は「どのように日常生活でフランス人を模倣すべきかを論ず」という講義要綱の中で、フランスの宮廷文化をドイツの大学改革のための手本として描き出していた。<sup>12</sup> つまりトマジウスの講義予告は、フランス文化の理想の基盤にある行儀や学識、賢明さや礼節などの美德を自身のうちに調和させた「理想的な人格の持ち主の養成」を大学改革の出発点とし、「学生や講師たちを世事に明るい、社会的能力のある存在にしようとする一つの文化プログラムを含んでいた」のである。<sup>13</sup>

トマジウスのこのような世俗的で実用的な傾向を持った啓蒙主義的な大学改革の構想は周囲から大きな反発を受け、彼は結局ライプツィヒを去らざるを得なくなり、ハレへと移住する。そこで彼はブランデンブルク選帝侯の命によりハレ大学設立に尽力し、設立準備中の大学の唯一の教授としてただちに50名の学生をハレに呼び寄せるに成功すると、大学にはまだ講義室も用意されていなかったために、民間の建物で授業を開始した。<sup>14</sup>

こうしてハレは初期および最盛期のドイツ啓蒙主義の中心地となっていくのだが、ヴァイグルによると、「この初期段階では宗教的な改革運動と啓蒙主義はまだはっきりとは分かれてはいない」ので、「ハレ大学は、敬虔主義とその多方面にわたる宗教的社会的改革活動からもその本質的な成果を受け取っている」<sup>15</sup> という。

ドイツ敬虔主義の代表的指導者の一人となるアウグスト・ヘルマン・フランケもライプツィヒ大学で聖書文献学の演習を行っていたが、やがて彼らの敬虔主義運動は正統派神学部と対立するようになり、ライプツィヒを去ったフランケはハレ大学にヘブライ語とギリシア語の教授として招聘される。1695年に彼はハレに貧民学校を設立し、また1698年にはハレ大学神学部の教授となる。そして1713年にフリードリヒ・ヴィルヘルム一世が即

<sup>10</sup> 同上、資料(10) – (13)。

<sup>11</sup> エンゲルハルト・ヴァイグル『啓蒙の都市周遊』(岩波書店 1997年) 40ページ。

<sup>12</sup> 同上 41 ページ。

<sup>13</sup> 同上 41–44 ページ。

<sup>14</sup> 同上 63–64 ページ。

<sup>15</sup> 同上 63 ページ。

位すると、その支援も受けてハレはドイツ敬虔主義の重要な拠点となっていくのだが、禁欲的で内省的なフランケの敬虔主義と世俗的で礼節や社交性を重視するトマジウスの折衷主義との間には、架橋しがたい断絶もあったのである。<sup>16</sup>

1706年にはもう一人の重要な人物がハレ大学に赴任する。哲学者のクリスティアン・ヴォルフである。彼は数学と自然科学の教授として招聘されたが、1709年以降は論理学や形而上学、倫理学の講義も担当するようになる。これらの講義活動を通してヴォルフの哲学体系は構築されていくのだが、明晰な概念や厳密な論証に基づいた体系的理論を追究するヴォルフの哲学の方法はトマジウスやフランケとは根本的に異質なものであり、彼の講義が学生たちの人気を得て影響力を増していくにつれて、学内での対立も強まっていく。

そして1723年11月12日、一つの大きな事件が起こった。講義に赴こうとするヴォルフのもとにプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世からの勅令が届き、ヴォルフは職を解かれ、国外への退去を命じられたのである。講義や著作で啓示宗教に背く教説を唱えているというのが、その理由であった。

彼は1721年に副学長の任期終了に伴い、後任となる神学部の敬虔主義者ヨアヒム・ランゲに引き継ぐさいに、「中国人の実践哲学」という記念講演を行っていたのだが、その中で最古の中国人が宗教とは無関係な「人間の諸力」だけで徳を実践することができたこと賞賛した。これが敬虔主義の神学者たちにとって無神論の擁護とも受け取られたのであり、これを一つのきっかけとして敬虔主義者たちの反ヴォルフ闘争は激しくなった。その頃ヴォルフは学生にも非常に人気があり、ヨーロッパ各地でも名声が高まっていたが、国王もついに彼を追放せざるをえなくなったのである。<sup>17</sup>

ヴォルフはハレを立ち去ると、招聘を受けていたマールブルク大学の哲学教授に就任し、やがてフランス・アカデミーの会員にも選出される。一方ハレにおいてもヴォルフ擁護派の活動が活発化し、敬虔主義者たちの影響力は弱まってくる。そうして1740年にフリードリヒ二世が即位すると、ヴォルフは再びハレ大学に復帰するのである。しかし、その間にハレ大学哲学部ではアレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテンが1737年から私講師を務めており、彼が1740年にフランクフルト・アン・デア・オーダーの大学へ教授として赴任していったあとは、その弟子のゲオルク・フリードリヒ・マイアーが後任となり、学生たちの人気を集めていた。そして、彼らによって始められた新しい感性的認識の学としての美学が、人間学的転回の一つの重要な現象をなしているのである。

ハレ大学は創設当初から医学の分野でも有力な教授を招聘していた。それはフリードリヒ・ホフマンとゲオルク・エルнст・シュタールで、この二名によってハレ大学は医学においてはライデン大学に匹敵したとも言われている。<sup>18</sup> ホフマンとシュタールはともに

<sup>16</sup> ヨハネス・ヴァルマン（梅田興四男訳）『ドイツ敬虔主義』（日本キリスト教団出版局 2012年）106-128ページ参照。

<sup>17</sup> 山本道雄『ドイツ啓蒙の哲学者クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記』（晃洋書房 2016年）1-4ページ参照。

<sup>18</sup> 同上 14ページ。

1660 年生まれで、同じ時期にイエーナで医学を学んでいる。ハレ大学ではホフマンが解剖学、物理学、化学、外科学、臨床医学を教え、シュタールが植物学、生理学、病理学、養生法、薬物学、医療制度を講じていた。しかし彼らはそれぞれ異なる人間観を持ち、オフマンは機械論、シュタールは生気論の立場から医学理論を構築していた。<sup>19</sup>

ホフマンは「解剖学および化学と結んだ機械論だけが医学を諸分派の泥沼から救い出して、それを正しく向上させることができる」<sup>20</sup>と考え、人間の生命現象も「物質」と「運動」から捉え、病気を人体のはたらきの乱れないしは減弱として生理学的に理解しようとする。しかし彼は機械論者ではあっても唯物論者ではなく、心や神の存在も認めていた。人体の運動や感覚を司るものとしてデカルトの動物精氣説を取り入れ、それが脳に存する「感性のアニマ」(anima sensitiva) の道具であるとし、そのアニマの上位には不死な「こころ」(mens) があり、それは運動の源である神によって作られたもので、身体と互いに交渉し合うと彼は考えていたのである。<sup>21</sup> しかし病気の治療においては機械としての身体の物理的処置に重点を置いた。

一方のシュタールはフロギストン（燃素）説を唱えた化学者としても有名であるが、医学者としては生命現象における心（アニマ）の作用を重視する。彼は人間の身体を単なる物質ではなく生命を持つ生きた有機体として捉え、そこに生命を与えていた非物質的な靈的実体を「アニマ」と呼んだ。彼の説によると、このアニマが生きた生命体としての身体を形成し、それを支配し制御することによって、身体は物理的崩壊や腐敗としての死から守られ、生命を維持するのだが、アニマが障害を受けると身体は病気になり、アニマが身体から抜け出すと、身体は生命を失って死んだ物体になる。彼はまたアニマをしばしば「自然」(natura) とも呼び、病気の治療においても身体への物理的な処置より自然治癒力を重視した。<sup>22</sup>

シュタールはその後、1715 年にプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世の侍医となってハレ大学を去り、ベルリンへと活動の場を移すことになる。一方ホフマンも 1709 年にいったんプロイセン王フリードリヒ一世の侍医となってハレを離れたが、三年後の 1712 年には再びハレ大学に戻り、1742 年に逝去するまで研究教育活動を続けた。

ホフマンとシュタールはそれぞれ機械論と生気論という異なる立場をとる医学者であるが、いずれも極端な唯物論者や唯心論者ではなく、人間が精神と身体という二つの実体から成り立つものであり、その両者が相互に関連しているという見解においては一致していた。ただその重点の置き方が異なっていただけである。そして彼らのこのような精神と身体の相互交渉という観点を引き継いだハレ大学の若い医学者たちによって、1740 年代における人間学的転回が起こってきた。

<sup>19</sup> 梶田昭『医学の歴史』（講談社 2003 年）212–213 ページ。

<sup>20</sup> 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤（上）』（岩波書店 1977 年）339 ページ。

<sup>21</sup> 同上 341–342 ページ。

<sup>22</sup> 同上 346 ページ。

### 3. 感性的認識の学としての美学の誕生 — バウムガルテンとマイアー

ツェレがハレにおける人間学的転回の一つの表れとしてあげているのが、バウムガルテンやマイアーらによる感性的認識の学としての美学である。バウムガルテンは 1730 年にハレ大学に入学して哲学と神学を学び始めていた。このときヴォルフはすでにハレを追放されてマールブルクに移っていたが、バウムガルテンが熱中したのはまさにこのヴォルフの哲学体系であった。そして彼は 1735 年に発表した論文『詩に関するいくつかの哲学的省察』において「詩学」を「合理的哲学」と結びつける試みを行い、その末尾の方で「真理を認識するさいに上位認識能力を導く学問」としての論理学との類比に基づいて、「下位認識能力」を導く学問を構想し、これを「美学」(aesthetica) と名付けた。<sup>23</sup>

1737 年に彼は私講師となり、1739 年には『形而上学』初版を出版する。その翌年の 1740 年にフランクフルト・アン・デア・オーダーの大学へ哲学教授として赴任すると、1742 年には美学の講義を開始し、1750 年に『美学』第 1 卷を、1758 年に第 2 卷を刊行した。大著『美学』は彼の病気と 1762 年の死によって未完に終わるが、バウムガルテンがそこで行った試みを小田部胤久は「從來の修辞学をヴォルフ哲学の合理主義的認識論の枠組みから捉え直すという作業」<sup>24</sup> であったと論じている。

バウムガルテンがその美学のもととしたヴォルフ哲学の合理主義的認識論の枠組みは、ヴォルフの『経験的心理学』にみることができる。ヴォルフは心理学を「人間が心について経験を通して認識するもの」を扱う経験的心理学と「その根拠を心の本質および本性の内に示す」部門としての合理的心理学とに区分した。1732 年に初版が出版された『経験的心理学』の第 1 部において、彼は人間の認識能力を上位認識能力と下位認識能力とに分けているが、下位認識能力を最も下位の段階の感覚から想像力、創作力、記憶へと、上位認識能力を注意と反省から知性へと上昇させながら論じた上で、知性のはたらきとしての論理学を提示している。その第 2 部では欲求能力が扱われ、これもまた上位能力と下位能力とに分けられるが、下位能力は快不快の感情や情念で、上位能力は意志および自由であり、実践哲学の基礎をなす。こうした理論的枠組みの中でヴォルフが等閑視した下位能力を考察対象とする学問として、バウムガルテンは美学を構想したのである。<sup>25</sup>

1740 年にバウムガルテンがハレ大学を去ったあと、後任となったのは弟子のマイアーであった。同じ年にヴォルフがハレ大学教授に復帰しているが、マイナーの講義は人気があり、多くの学生たちが聴講に来ていたようである。彼は 1746 年に員外教授、1748 年に正教授となり、1777 年に逝去するまでその職を務めた。

マイナーはバウムガルテンの感性的認識の学としての美学の構想に協調し、バウムガルテンの美学講義をもとにして『全美的学芸の基礎』を著し、バウムガルテンの『美学』よりも早い 1748 年から 1750 年にかけて全 3 卷を出版した。バウムガルテンの美学が難解

<sup>23</sup> 小田部胤久「ヴォルフとドイツ啓蒙主義の暁」(加藤尚武(責任編集)『哲学の歴史 第 7 卷 理性の劇場』中央公論社 2007 年) 65-66 ページ。

<sup>24</sup> 同上 66 ページ。

<sup>25</sup> 同上 63-65 ページ。

なラテン語で書かれているのに対して、マイラーのものは平易なドイツ語だったため幅広く読まれ、美学の思想を普及させる上で大きな役割を果たしたとも言われている。<sup>26</sup>

マイラーはまた、1744年著書『情動全般に関する理論的教説』で「人間における情動の学問」<sup>27</sup>を構想している。彼はこの学問領域を「理論的教説」と「実践的教説」の二つに区分するのだが、後者は情念の道徳的管理の問題を扱うものであり道徳学の一分野とされ、情動の性質自体の解明を目指す前者の「理論的教説」がマイラーの情動論では中心的分野となる。<sup>28</sup> そしてこの「理論的教説」はさらに「心理学的教説」と「美学的教説」とに区分され、前者は情動全般の性質やメカニズムを扱う分野であるが、後者の「美学的教説」はとくに情動と感性的認識との関連を扱い、詩学や弁論術などとも深く関係し、情念の喚起と沈静、情念の記号を問題とする。<sup>29</sup> 情念の記号というのは情念の身体的表出であり、顔色や表情や声の調子の変化、身体的動作などを情念の記号として観察し、そのような身体的变化と情念との関連を考察することが重要なテーマとなる。

マイラーは第1章「情動全般の説明」で、魂における表象に対して「欲求」(Begehr)ないし「嫌惡」(Verabscheuen)が生じ、そこから情動が引き起こされると説明するが、「判明」な欲求や嫌惡は「意志」(Wollen)の問題となるのに対し、「混乱した」あるいは「曖昧」な欲求と嫌惡は「感性的」(sinnlich)なものであって、その中でもとくに「混乱した」欲求と嫌惡が情動や情念の惹起に関与する。<sup>30</sup> したがって、「情動とは、激しい混乱した欲求や嫌惡である、あるいは、混乱した認識から生じる大きな感性的欲求や嫌惡である」<sup>31</sup>ということになる。このようにマイラーは、認識という魂の力の能動的な活動に情念の根源を求めようとした。<sup>32</sup>

第2章では、情動の発生のメカニズムが論じられ、情念を引き起こす認識とは「極めて鮮明で、感性的に確実な、一つないしほいくつかの完全性と不完全性の、大きな直観的な認識」<sup>33</sup>であり、そのような認識を得るには「知覚」や「想像力」、「記憶」、「創作力」、「機知」、「予見力」、「趣味あるいは感性的判断力」といった「魂の下位能力」が大きな役割を果たしていることが示されている。<sup>34</sup>

こうしてマイラーは情念の問題を魂の下位の能や感性的認識と関連させながら、身体と魂の相互関連において捉えようするのであり、そうした点にも人間学的転回の大きな特徴を認めることができるだろう。

<sup>26</sup> 神林恒道「近世美学の発端—バウムガルテンとヴィンケルマン」(当津武彦(編)『美の変貌』世界思想社 1988年) 42-43ページ。

<sup>27</sup> Georg Friedrich meier: *Theoretische Lehre von den Gemüthsbewegungen überhaupt*. Halle 1744. (Nachdruck: Frankfurt a.M.: Athenäum 1971) S. 2.

<sup>28</sup> Ebd., S.5ff.

<sup>29</sup> Ebd., S.7f.

<sup>30</sup> Ebd., S.28.

<sup>31</sup> Ebd., S.30.

<sup>32</sup> Ebd., S.38ff.

<sup>33</sup> Ebd., S.69

<sup>34</sup> Ebd., S.70ff.

#### 4. 「理性的医師」たちによる心身相関医学 — ウンツァー・クリューガー・ニコライ

ハレ大学哲学部における人間学的転回に対応するような動きは医学部においても起こっていた。そこで行われたのは、ホフマンの機械論とシュタールの生気論を調停させようとする試み、さらには医学と哲学を融合させようとする努力である。

その重要人物の一人であるヨーハン・アウグスト・ウンツァーは 1727 年にハレに生まれ、ハレ大学で哲学と医学を学ぶが、とくにマイラーとクリューガーから大きな影響を受けて、<sup>35</sup> 1746 年には『情動に関する新教説』を出版している。これはタイトルからわかるように、先に挙げたマイラーの情動論に触発されたものである。彼はまた同年、『身体への魂の影響に関する考察』を発表し、心身交渉の問題に関する従来の諸説を検討した上で、「魂と身体は物理的に交互に作用している」<sup>36</sup> ことを論じ、シュタール主義と機械論との間に根本的な対立がないことを示そうとしている。彼が目指したのはシュタールの生気論的医学とホフマンの機械論的医学の中道であり、そのような方向へ進む医師たちのことを「理性的医師たち」(vernünftige Ärzte)<sup>37</sup> と呼ぶようになった。

ウンツァーは 1748 年に医学博士の学位を取得すると、1750 年には医師となってハンブルクへ移っていくが、その年に『人体全般に関する哲学的考察』を出版する。恩師マイラーに捧げられたこの著書の中で、彼は「いわば哲学と医学の間に成立しなければならないであろう中間的学問」<sup>38</sup> を見いだそうと努力したことを見たり、人間の身体を「自然本性」(Natur) という観点から考察している。そこではまず物質としての身体のはたらきが力学的および化学的法則にしたがって機械論的に説明されたあとで、知性や意志などの精神のはたらきとの関連が論じられている。なおウンツァーはその後、1759 年から 1764 年にかけて『医師』(Der Arzt) というタイトルの通俗的な医学雑誌を刊行するようになるが、この雑誌は多くの読者に購読されて大成功を収め、理性的医師たちの新しい医学を広く普及させる重要な媒体となった。<sup>39</sup>

医学におけるウンツァーの師であったヨーハン・ゴットリープ・クリューガーは 1731 年にハレ大学に入学し、1743 年に医学部の員外教授となり、1750 年にヘルムシュテット大学に正教授として転出するまでハレ大学で教えている。彼も 1745 年の著書『医学の新教説体系の概要』で、自分の教説が「機械論者たちの説ともシュタール主義者たちの説とも調和している」<sup>40</sup> ことを述べて、両者の対立の「調停者」(Friedensstifter) となることを希望している。そこから彼は経験的事実に基づいた観察や実験による心理学を重視す

<sup>35</sup> Matthias Reiber: Anatomie eines Bestsellers. Johann August Unzers Wochenschrift »Der Arzt« (1759-1764). Göttingen: Wallstein 1999. S.25f.

<sup>36</sup> Johann August Unzer: Gedancken vom Einfluß der Seele in ihren Körper. Halle: Hemmerde 1746. S.123.

<sup>37</sup> この名称は 1752 年に『ハンブルク雑誌』に掲載された論文「故枢密顧問官シュタール氏の医学における理論的原則に関する考察」の中で用いられている。Vgl. Carsten Zelle (a.a.O.) S.8f.

<sup>38</sup> Ders.: Philosophische Betrachtung des menschlichen Körpers überhaupt. Halle: Hemmerde 1750. Vorrede (unpag.).

<sup>39</sup> この雑誌の概要についてはとくに、Reiber (a.a.O.) を参照されたい。

<sup>40</sup> Johann Gottlieb Krüger: Grundriß eines neuen Lehrgebäudes der Artzneygelahrheit. Halle: Hemmerde 1745. S.8.

るようになる。

クリューガーは1756年の『実験心理学試論』で「医学と哲学の間の姉妹的結合」<sup>41</sup>という観点からそのような新しい心理学を「実験心理学」(Experimental Seelenlehre)として構想している。この実験心理学では人間の特殊な心理的現象の観察や考察を重視しており、後半には付録として、とつぜん白髪になった人物や、ヒポコンドリーの治癒、記憶喪失、想像力の異常な作用、メランコリー、予知夢、夢遊病者など多数の症例記録の事例が掲載されている。そしてこの試みは、後にカール・フィリップ・モーリッツの『経験心理学雑誌』へと引き継がれることになる。

ウンツァーと同じくハレ大学でクリューガーの教えを受けたエルンスト・アントン・ニコライは、心身の相互交渉の問題において「想像力」(Einbildungskraft)の機能を重視し、1744年に『人間の身体に対する想像力の作用』を著して、想像力が身体に及ぼす様々な影響について考察した。1751年に彼はそれに大幅な加筆と改訂を加え、『人間の身体に対する想像力の作用に関する考察』を出版している。

ニコライは基本的にはヴォルフの心理学体系に依拠しながら、魂の様々な能力の階層構造との関連において想像力を捉え、それを「かつて保持していた、あるいは過ぎ去ってしまった知覚をふたたびもたらす能力」<sup>42</sup>と定義し、そしてとくに「想像を分割し、様々な想像の部分や断片から新たな表象を合成し創り出す能力」<sup>43</sup>をヴォルフやマイラーに倣つて「創作力」(Dichtungskraft)と呼んでいる。

想像力や創作力によってもたらされた知覚の表象は、現実の知覚よりもその鮮明さにおいて通常は劣っているが、想像による表象が現実の知覚と混同するほど鮮明になることもある。想像力は知覚の表象とともに情念をも喚起しうるが、表象の鮮明さはこの情念と結びつくことによって増幅される。<sup>44</sup> そして、鮮明な表象や情念は、脳において神経液の活発な動きを引き起こして身体に作用し、身体に変化をもたらすのである。<sup>45</sup>

このように想像力の身体への作用を説明したあとで、ニコライは想像力に心身相関的な病的状態に対する治療手段としての可能性を見いだしている。たとえば、悲哀の情念に起因するようなメランコリーに対しては、想像力によってそれと対立する情念を引き起こすことが有効な治療手段となるし<sup>46</sup> またヒポコンドリーのような知覚と想像の混同への対処としては、誤った表象へのこだわりと対立する知覚をもたらすことによって是正したり、病気の原因は実際には除去されていることを確信させることによって思いこみを是正したりする方法が提示されるのである。<sup>47</sup>

<sup>41</sup> Johann Gottlieb Krüger: Versuch einer Experimental=Seelenlehre. Halle: Hemmerde 1756. S.20.

<sup>42</sup> Ernst Anton Nicolai: Gedancken von den Wirkungen der Einbildungskraft in den menschlichen Körper. Zweyte vermehrte Auflage. Halle: Hemmerde 1751. S.16.

<sup>43</sup> Ebd., S.24.

<sup>44</sup> Ebd., S.32.

<sup>45</sup> Ebd., S.33ff.

<sup>46</sup> Ebd., S.46f.

<sup>47</sup> Ebd., S.118.

## 5. おわりに — その後の展開

1740年から50年頃にかけてハレ大学の「理性的医師」たちによって始められた新しい心身相関的な医学やそれと関連する学問領域は、1772年にエルンスト・プラトナーの著書『医師と哲学者のための人間学』によって「人間学」(Anthropologie)の名称が与えられた。プラトナーはその序文の中で、「人間は身体のみでも魂のみでもなく、その両者が一体となったもの」であるから、「道徳学者が魂のみに制限されではならないのと同じように、医師も身体のみに制限されではならない」<sup>48</sup>と述べる。そして「身体と魂をその相互の関連や制約、関係において観察する」<sup>49</sup>ような医学と哲学が融合する学問領域を「人間学」として提示するのである。

バウムガルテンやマイラーによって始められた感性的認識の学としての美学や情動論は、その後さらにズルツァーやレッシング、ヘルダー、モーゼス・メンデルスゾーンへと引き継がれ、芸術論や文学論とも深く結びついていく。またクリューガーによる心理学的事例の観察や考察を中心とする経験的心理学もモーリッツらに継承され、その具体的な事例は文学作品にも用いられるようになってくる。

このようにして、十八世紀半ば頃に起こった人間学的転回は人間をその心身相関において観察し、近代的人間としてその新たな姿を発見するようになるのだが、それと歩調を合わせるようにして、そのような近代的人間を描き出す新しい近代文学が成立してくるのである。

(本研究はJSPS科研費JP16K02568の助成を受けたものです。)

<sup>48</sup> Ernst Platner: Anthropologie für Ärzte und Weltweise. Erster Teil. Mit einem Nachwort von Alexander Košenina. Hildesheim: de Gruyter 2000. (Nachdruck der Ausgabe 1772). S. IV.

<sup>49</sup> Ebd., S.XVI.